

## 資料館だより

Vol.48 No.1 (通巻238号)

2023. 6 .25(年4回発行)



The Western Detached Palace, NUMAZU.

沼津西御用邸

### 絵葉書『沼津 西御用邸』The Western Detached Palace, NUMAZU (榎原公幸氏所蔵 明治40年~大正7年)

市内吉田町の榎原公幸さんから企画展のために提供して頂いた古い絵葉書一枚を紹介します。

『沼津西御用邸』と題するこの写真に写されている門は現在の旧沼津御用邸西付属邸の正門ではありません。左側に本邸の石塀が写っており、現在の本邸と西付属邸の間にある海岸に向かう通路に面していたものです。後方には川村家沼津別邸時代の建物が見えます。

沼津御用邸西付属邸はもともと明治天皇の皇孫である迪宮裕仁親王(昭和天皇・明治34年4月誕生)とその弟の淳宮雍仁親王(秩父宮・同35年6月誕生)の養育を委嘱された川村純義伯爵の沼津別邸でした。楊原村善太夫の飛び地である字島郷林に所在しており、明治24年(1891)以前に建てられていました。

明治35年(1902)7月から毎年、避寒と保養を兼ねて裕仁親王が、同年11月からは同居する雍仁親王も長期に渡り滞在しました。明治35年9月には両親王の御座所等の増築費が川村家に下賜されています。

明治37年8月12日に川村純義が没すると、以後の養

育は東宮侍従の木戸孝正に委れられ、川村家の辞退もあり、両親王は東宮御所での養育が決定され、同37年11月に麻布区飯倉狸穴町の川村邸から帰還となりますが、そのまま沼津御用邸(本邸)に移られました。この間に東宮御所の御産所を皇孫仮御殿とすることが決定されており、沼津御用邸からはこの仮御殿に戻られています。

明治38年1月には、川村家別邸の献上願いが純義の継嗣川村鉄太郎伯爵からありましたが、7月に皇孫御用邸として買上げられ、沼津御用邸西付属邸となりました。

明治39年2月に皇居賢所御仮殿付属建物を西付属邸に新御殿として移築し、旧川村家別邸の西側に接続する工事が竣工しました。裕仁・雍仁両親王は新たな御座所を使い、その間の明治38年1月に誕生した光宮宣仁親王(後の高松宮)は川村家別邸時代の両親王御座所を使用したとあります。増築により西付属邸の主殿となった建物に入る新たな車寄せと正門も作られました。これが今も残されている西付属邸正門です。

絵葉書の「西御用邸」は、発行は少しずれますが、新御殿移築前の川村家沼津別邸をそのまま継承した西付属邸を指し、写真はその当時の姿を伝えてくれます。

## 駿河湾の漁

## 川口 洋司さんの漁話

## クロザメの延縄漁

今号は網組の休みの時などに少人数で行う小規模の漁であるクロザメの延縄漁の紹介です。前号では仕掛けによるハモ（アナゴ）漁の紹介を行いました。今号はハモ漁の次に行っていた漁になります。

クロザメという言葉は特定の種類のサメを表す言葉ではなく、黒っぽいサメの総称でヨロイザメやユメザメといった深海に生息する体長1mに満たないサメが該当します。重量も10kgを超えるようなものは珍しく、ほとんどは10kg未満でした。

クロザメ自体は1年中捕ることができる魚ですが、川口さんがクロザメの延縄漁を行う時期は、秋口から春先にかけてです。1年中捕ることができるにも関わらず、時期が限定される理由は、春から夏にかけては網組で行う巾着網漁が忙しくなるため、春は小型のイワシ類の盛漁期、夏はカツオやマグロの盛漁期にあたるため、この時期はクロザメの延縄漁をはじめコショウパイと呼ばれる個人漁は行いづらくなります。

川口さんが行っていたクロザメの延縄漁の漁場は、土肥沖から戸田沖になります（図1）。ここには駿河トラフが走っており、水深が深い溝が続いているため、深海性のクロザメを釣る場所として適していました。

200尋（約300m）のナワ（延縄）をひとまとめにしてナワカゴ（延縄籠）に入れておきますが、クロザメの延縄漁の場合、30枚程度のナワカゴを持参し、1本に繋げて漁を行うため、延縄の全長は9km程度の長い距離になります。海にナワを落として仕掛ける時間も、仕掛けたナワを曳き揚げる時間も長時間となるため、1日行えるクロザメの延縄漁は1回となります。

ナワは1本のミチナワ（幹縄）に30本程度のエダ（枝縄）がついた仕掛けです。エダの先には釣針がつきます。エダの先はワイヤーになっており、サメが釣針に食いついたときにエダが歯で食いぢられないようにしています。釣針にはイネムリヅリという先端が内側に曲がっているものを使います（写真1）。釣針につける餌にはイカを使用します。イカを幅1cm長さ15cmほどの短冊状に切ったものを釣針に引っ掛けておろげます。

クロザメの延縄漁は夜間に行う漁です。夕方に出漁し、漁場に向かいます。駿河トラフに沿って南北にナワを仕掛けます。仕掛ける水深は大体水深300mぐらいのところになります。ナワが海底についてしまうと根がかりしてしまうこともあるので、所々にボンデン（目印となる旗がついた浮子）やアンバ（浮子）をナワにつけて海底から少し浮くように調節します。船を

走らせながら、ナワに餌をつけて海に落としていきます。用意したナワを仕掛け終わると、その場で1時間ほど待ってクロザメの食いつきを待ちます。

船を仕掛け始めた場所へ戻るように走らせてナワを曳き揚げていきます。曳き揚げる時にはラインローラー（巻き上げ機）を使って曳き揚げます。サメというと狂暴なイメージがありますが、クロザメは大人しい魚で、甲板にあげても暴れることはありません。そのままカメ（魚船）へと入れられます。

水揚げしたクロザメは狩野川河口の我入道の練り物屋がkg単位の値段で買い取ってくれました。クロザメの身の部分ははんぺんや蒲鉾などの練り物に加工されます。また、肝臓からはスクアレンという肝油が精製されます。スクアレンは健康食品や化粧品の原料として利用されます。クロザメのkg単価はそれほど高いものではありませんでしたが、いつ行っても1t程度の漁獲があったのでいい収入源となりました。

練り物屋の閉業によりクロザメを引き取ってくれるところがなくなってしまったため、クロザメの延縄漁は行えなくなりました。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



図1：クロザメの延縄漁の漁場



写真1：イネムリヅリ 沼津市歴史民俗資料館所蔵

## 『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

## ■香貫・我入道編 その9 下香貫の地形と遺跡

●砂礫堆(沖積段丘)と土地利用 下香貫村は「元禄郷帳」で1149石余、安永6年(1777)の「下香貫村明細帳」での石高は1020石余、家数222、人数949であった。面積が119町4反7畝の広大な村であり、田56町5反余、畑44町3反余、屋敷2町1反余で、16町余の田では二毛作が行われていた。土地は真土が少なく、多くは小石混じりの砂地と野土場であった。この「野土」は腐植質に富む肥沃な黒土で、作物栽培に適する。

文久元年(1861)編纂の駿河国の地誌『駿河志料』によれば「古くはこの村、用水・灌漑の便を欠いていたという。山水を湛えて用水を充る。古くの溜池跡があり。」と記す。すでに弘化4年(1847)の四ヶ村絵図面に「堤」と書かれ、用水溜池(溜井)が八重坂の八重団地寄りに1ヶ所描かれている。なお南東側山麓の字猪沼の地が溜池跡と思われる。因みに新溜池(現八重公園)の北西側、上香貫分の字仰天ヶ峰は祇園天王の転訛で、天王宮が山の中腹にあった。

古代の条里水田は成立しにくい<sup>が</sup>、字六反・矢丸に数で2坪分想定できる。方位も若干東側に振れる方格地割だが、歪みも強く整然さはない。元々畑地で区画に接した灌漑水路がなく、条里水田とは認定しがたい。周辺の水田の灌漑は宮原の地を開削後の香貫用水によるもので、それ以前は雨水に頼る「天水場」であった。

「香貫微高地」の砂礫堆は、北部の上香貫の本郷付近から宮原を経て、下香貫の藤井原に至る緩い傾斜の約2kmほどの連続面である。香貫山山麓の傾斜変換点から河畔や海岸に向かって緩やかに傾斜した平坦面であり、推定して検討した方格地割はこの地形面から、後背低地側に移行する漸移部などに施されている。

しかし周辺の土地は、かつて天水に頼るのみで日照りに弱く、水不足で立ち枯れや減収となる「日損田」が多かった。香貫用水の水掛りの関係から、下香貫の砂礫堆上の畑地では明治初頭まで綿栽培が盛んで、主産物の位置にあった。その後綿糸の輸入で全廃し、それに代わって蔬菜が拡大している。明治15、6年頃から胡瓜栽培が増加し、香貫の促成蔬菜として市場で名を博した。

一方微高地の背後、東側の水田の広がり、砂礫堆により閉ざされた袋状の凹地で、下香貫字八重の地に上香貫分の「飛び地」が入り込んで点在したが、過湿地の開墾や溜池構築に伴う新規開田がその理由である。

●香貫九十九塚 「香貫微高地」の南部に当たる下香貫地区の場合、字八重原・仕込や字上ノ原・石原・藤井原などの砂礫堆の高まりは開発の歴史が古く、弥生後期からの山ノ根遺跡、古墳後期の宮原古墳群、二瀬川遺跡、八重古墳、オカゴヤシキ遺跡、古墳前期と奈

良・平安時代の藤井原遺跡などがある。

明治24年発行の『駿河国駿東郡沼津町略図』の観光案内では、「此辺古戦場」とし、また南部の字藤井原の大塚古墳辺を「九十九塚」と記している。「香貫九十塚」とも呼び、『駿河志料』では「九十塚は、香貫山の辺、昌中又狩野川塘處々に大石を寄せて築ける塚、その数多し、故に里人九十塚と云う。」とある。狩野川堤・古墳は上香貫の浅間社、現玉作神社を指し、かつて天井石や側壁などの露岩が目立った。

中世の今川や北条・武田勢力の「古戦場」と流布されたが、決してそうではなかった。香貫地区の古墳は概ね6世紀から7世紀にかけてのもので、かつて香貫一帯には大古墳群が存在した。上香貫では中瀬町に10基程度の天神洞古墳群、本郷町・住吉町付近には「東本郷町古墳群」がある。また天神洞の共同墓地奥部分の横穴や霊山寺裏の7～8世紀の11基の横穴群、その他周辺の山麓部には古墳後期の横穴墓が多数存在する。

なお古墳時代の集落立地はほぼ砂礫堆に限られ、生産地域は上香貫と異なって、東側の袋状低地や前面の氾濫原の一部など、地下水面が浅く保水性も良い土壌故に、局所的ながら農耕の展開があった地域である。

●藤井原遺跡 遺跡の立地環境は「香貫微高地」、地形的には「砂礫堆」の最南端で、臨海部の標高約3mの地に位置する。周辺低地との比高差は1～2m程度、遺跡西側の西村で明瞭な崖をなす沖積段丘(完新世段丘)の特徴を持つ「低位段丘性集落」である。

最下層は旧砂礫州を形成した富士川系砂礫で、砂礫層の上部は泥流堆積物起源の黄瀬川や狩野川の砂層であり、浅海ないし汽水域と考えられる。古墳時代中頃の小海進は河畔的環境で、古墳中期の住居址を浸食し



藤井原遺跡と大塚(●部分)

A: 八重古溜池 B: 猪沼 C: 六反 D: 矢丸

※米軍空中写真(昭和22年9月)を使用

て狩野川の川砂に似た砂質土が厚く覆っている。

検出された住居址や掘立柱建物などの遺構は、古墳前期と律令期を主体とし、弥生中期から江戸時代にまで及ぶ。住居址に何らかの鉄製品が出土し、その普及率が高い。特に注目される遺物では、律令期の竪穴住居址の約半数、52基中から発見された大型の埴形土器であり、総数が実に200点近くに達する。大量に出土した埴形土器は煮堅魚（荒堅魚）作りの道具と推定され、その工房としての色彩が強い。集落の性格は計画的に造られたムラと推定される、非常に特徴的な大規模集落である。

その当時煮カツオや煮汁などが「調」として、北西部に位置した駿河郡衙へ納めるために処理されていた。荷札木簡から見て、伊豆半島の各地からカツオ等を海上から直接運び込み、伊豆・駿河両国の貢進物の加工を集中的に実施していた集落と言える。

また一方で、外海側の内浦湾における回遊性のカツオの捕獲の際には、有頭石錘や中を削り貫いた土錘も

多く、網を用いて周辺の民と集団漁労を行っていたと推定される。このように奈良・平安時代には、一大漁村集落としての性格を強めており、農業よりも漁業に強く特化した代表的な遺跡である。

遺跡周辺の地形環境からも、沖積地の陸化の過程で農耕の生産活動が成立し得たと言える。また網の錘にする数10点の有頭石錘、多量の土錘や石錘のほか鉄鏝も出土しており、川漁や銚の突き棒での漁労も行われていた。古墳時代初頭には、駿河湾地域特有の有頭石錘を用いた漁労活動に従事していたことを知る。遺跡の南側はラグーン（潟湖）性低地であり、塚田川寄りの字浜田・柿原の地に広大な沼が、さらに北東部の字八重などの沼沢地が漁労の対象であったと見られる。

ただし河川洪水などの自然災害による被災は深刻で、遺跡の北西に向けての排水溝も掘削したが、すぐに埋没してしまっている。一旦は居住を放棄して長い中断の時期があったように、狩野川の氾濫原沿いでかつ排水不良の低地のため、不安定な地形環境であった。

## 資料館からのお知らせ

### 令和5年度の企画展を開催します

今回の企画展は、今年の7月1日が沼津町と楊原村が合併して市制を敷き、沼津市が誕生した大正12年（1923）7月1日から100年を経た節目の年に当たることに因み、それを記念して開催するものです。

合併前後に発行された絵葉書の写真から当時の沼津市の姿、すなわち100年前の姿を紹介します。

近世の宿場町や城下町であった沼津町の中心市街地は、明治22年に東海道線の沼津停車場が設置されると、次第に旧城内に広がりを見せますが、大正2年3月の沼津大火で大部分が焼失し、それから復興を遂げた合併直後の大正12年9月1日の関東大震災でも一部被災し、さらに大正15年12月には再び大火に見舞われています。



絵葉書 沼津駅前避難（大正12年、関東大震災）（左右反転画像）

昭和5年11月の北伊豆地震でも被害があり、さらに昭和20年7月の沼津大空襲で焼け野原となり、当時の姿は全くと言うほど失われました。

しかし、度重なる災害の被害に見舞われながらも先人たちの努力で復興を遂げ、現在の姿があります。

この機会にもう一度沼津市の出発点である、当時の姿を振り返って見てはいかがでしょうか。

企画展 「絵葉書に見る100年まえの沼津」

会期 令和5年7月1日から9月24日

### 刊行物のご案内

下記の図書を刊行しました。頒布ご希望の方は資料館までお問い合わせください。

『沼津市博物館紀要 第47号』 2023.3.31

### 沼津市歴史民俗資料館だより

2023.6.25発行 Vol.48 No.1（通巻238号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)